



超心理学的研究～事例・知見・展望～ 再生型事例(「生まれ変わり」現象) 研究を中心に

大門 正幸¹⁾

n 1) 中部大学 人間力創成教育院

キーワード：超心理学、再生型事例、生まれ変わり現象、意識研究、死後存続仮説

【企画の趣旨】

19世紀の唯物論的科学主義の台頭と並行して勃興した心霊科学・超心理学研究は、脳の機能に還元できない人間意識に関わる現象を研究対象の中心とし、多くの成果をあげてきた。本企画シンポジウムでは、そのような研究に携わってきた大門、小久保がそれぞれの立場から(i) 代表的な事例の紹介、(ii) 当該分野の研究によって得られた知見、(iii) 今後の展望、の三点について報告し、超心理学的研究が今後目指すべき方向性について考察する。

【再生型事例の一例】

大門は15年にわたり、再生型事例(いわゆる生まれ変わり現象)について調査・研究を行ってきた。ここでは、その一例として、大門(2021)で報告し¹⁾、TBSの紀行バラエティ番組『クレイジージャーニー』でも取り上げられたゆう君の事例について紹介する。

事例の中心人物のゆう君は2014年6月生まれの男児である。誕生間もない頃から母親はひどい夜泣きに悩まされた。日本語の発達は遅かったが、英語には非常な興味を示し、両親や家族は全員日本語話者であるにも関わらず英語でないと反応しないこともあった。新しい場所に行くと監視カメラや火災報知器を探

し、閉店間際の店でシャッターが閉まるのを見るとパニック状態になることがあった。

三歳の時、次のような過去生記憶を語った。(1) 自分は同じような二つのビルの一つの100階で働いていた。(2) コンピューターと英語を使っていた。(3) ひとつのビルで事故があったらしく救急車や消防車が来ていた。(4) 自分のビルでも大きな衝撃を感じ、他の人を避難させ自分も避難しようとしたが間に合わず命を落とした。

幼稚園児の時には「自分は仕事に行かないといけない」と言って登園を拒否したり、大人のような言動で先生や他の園児を戸惑わせた。また、年少の時、避難訓練があったが、パニック状態になり参加することができなかった。

2020年、テレビ番組で本発表者の研究について知った母親から連絡を受けた。コロナ禍であったため遠隔で話を聞く形で調査を行い、その結果を著書の中で紹介した¹⁾。

2023年11月、著書を読んだTV番組スタッフが取材を申し入れ、ゆう君と母親同意の上で2024年8月5日から11日まで、ニューヨークでロケを行うことになった。

過去生の人物について、ゆう君は9/11 Memorialのプレートに刻まれた1,000を超える人物のうち13人について「馴染みがある」と答えたが、そのうちの5人は同一の会社の従業員

員で100階にもオフィスがあった。それらの人物についてMemorial Museumのデータベースで調べたところ、ある男性について「自分だと思ふ」と述べたため、その人物の姉の住所を探し出し、面談をもとめた。その結果、「再会」が実現し、ゆう君の過去生の人物の特定に至った。

【再生型事例研究によって得られた知見】

再生型事例研究は1960年代にバージニア大学の精神医学者イアン・スティーブソン博士によって開始された。それ以来、同大学を中心に調査が進められ、世界各地から2,600を超える事例が収集され、事例に見られる一般的な傾向が明らかにされてきた。

こうして得られた重要な知見の一つは、過去生記憶を持つ者の多くが非業の死を遂げていたり、強い思い残しがあるという事実である。これらの事実や、イメージ記憶と行動記憶に関する事実から、過去生記憶が一部の者のみが有する特殊な記憶ではなく、普遍的な記憶であることが示唆される²⁾。

また、「過去生記憶」は肉体を持たない、あるいは肉体が未発達な状態での「記憶」である「中間生記憶」「胎内記憶」「誕生時記憶」とも共通する性質を持っており、これらと合わせて考察することで、人間の意識が肉体後も存続し、その後新たな肉体に宿るとする

「死後存続仮説」に対して有力な「証拠」を提供する。つまり「生者サイ仮説」に対して強力な反例を提示している²⁾。

さらに、この結論は、再生型事例研究を通して得られた知見と臨死体験研究や霊媒現象研究などで得られた知見との共通点を考慮することで、より強固なものになる。

【再生型事例研究の今後】

再生型事例研究に限定して言えば、研究者一般にアクセス可能な再生型事例データベースの構築が必要であろう。事例の収集・分析

を行ってきたバージニア大学では200を超える変数によって分析された事例データベースを構築している（現時点では2,300程度が入力されている）。しかしながら、このデータベースはバージニア大学の関係者でなければ利用することができず、再生型事例研究の発展のためにはオープンなデータベースの開発が待たれる。この点については、筆者を含む

International Centre of Reincarnation Research³⁾のメンバーが中心となって、刊行された事例の分析に基づいたデータベースの構築を計画中である。

再生型事例研究を含むより大きな方向性のひとつは、前項でも触れた臨死体験や霊媒現象、今回のシンポジウムの発表者の一人である小久保氏が携わる異常現象といった、人間の意識が肉体を超越したものであることを示唆する他の現象と合わせて、人間の意識の実態に迫ろうとする研究である。これについては、本発表者たちの研究や、Academy for the Advancement of Postmaterialist Science⁴⁾のメンバーが中心となって行われている研究およびその発展研究が該当するであろう。

今後の展望については、様々な分野に携わる参加者の方々から意見をいただき、議論・意見交換を通して考察を深めていきたい。

【引用文献】

- 1) 大門正幸：「生まれ変わり」を科学する、東京：桜の花出版、2021.
- 2) Ohkado, M.; Katsugoro and Other Reincarnation Cases in Japan. Santa Fe, NM: Afterworlds Press.
- 3) International Centre for Reincarnation Research.
<https://www.reincarnationcentre.org/>
- 4) Academy for the Advancement of Postmaterialist Sciences.
<https://www.aapsglobal.com/>